

全地区宣教評議会 信徒代表者会議

2022 年度「平和旬間」・ 「INTERNATIONAL DAY」 に向けて



2月10日(土)、各地区の信徒代表者、酒井俊弘補佐司教、松浦謙神父と窓口を担うシナピス(教区社会活動センター)のスタッフが集集し、オンラインで全地区宣教評議会 信徒代表者会議が開催された。議題は今年度の「平和旬間(8月6日(土)15日(日)と「INTERNATIONAL DAY(10月16日)」について。

各地区の進捗状況を分かち合った後、「平和旬間」の教区共通のテーマと「INTERNATIONAL DAY」の開催方法話し合った。そこでまず、「日本カトリック平和旬間」の趣旨と経緯、

「大阪教区平和旬間」の歩み、ここ数年の日本のカトリック教会の出来事・動きなどを再確認した。その後、ブレイクアウトルーム(オンライン上で行うグループ・ミーティング)に分かれて、各地区から持ち寄った事案や教皇メッセージ、世界の情勢などについて活発な意見交換が行われた。外国籍信徒も一緒に取り組めるように、テーマは英語表記することが提案され、「A Road to Peace: Listening to One Another」互いに耳を傾けて平和への道を」に決定。これは信徒・司祭・修道者が互いに



野田正弘神父から
この一冊

司牧者がリレー形式で若者たちにぜひ読んでほしい書籍を紹介し、青年たちの読書感想文を掲載する連載。今回は野田正弘神父様(北摂西ブロック)が担当。

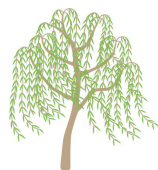


『柳橋物語・むかしも今も』(山本周五郎著、新潮文庫、2019年、693円(税込))

15歳の春、中学を卒業し就職した。ベルトコンベアに乗って流れてくるものに部品をガス溶接する仕事だった。一日に1500台ぐらいガスバーナーであぶった。夕方終わると定時制高校に通っていたが、社会に取り残された気がして、半ば自暴自棄になっていた。17歳、大型バイクを買い100キロ以上のスピードを出して、一種の暴走族まがいのことをしていた。小さな石でも前輪で踏めば、体が吹っ飛び、死ぬかもしれないと思ったが、それで死んでもかまわないと思っていた。いのちの価値がわからなかった。それだけでなく生きる意味も、目的も、愛も知らなかった。ゴーグルが曇る雨の

日はバイクに乗らず本を読んでいた。そんな時、この本に出会った。大げさかもしれないが、目からうろこが落ちた思いだった。生きるとは、愛とは、真実とは、が少しわかったような気になった。その後、三浦綾子、遠藤周作などの本に出会い、キリスト教に導かれた。私はずっと探していたものは、これだと思った。そして20歳の時、教会に通うようになり、その夏に洗礼を受けた。

本作品のように、山本周五郎の著作は時代物が多いが、歴史上の英雄を書くのではなく、市井の人びとの支えあう心を描いている。「砂漠が美しいのはどこかに井戸を隠しているからだよ」と星の王子さまは言うが、周五郎も隠れた愛の犠牲の美しさを描く作品が多い。



『もみの木は残った』、『日本婦道記』なども読んでほしい。人に知られることなく、人生を誠実に生き抜く素晴らしさを学べると思う。彼が描く主人公のように生きたいと憧れる。

今回は、ブラザー阿部真理(サンパウロ大阪宣教センター)です。

であるかもしれませんが、自分が愛されていることを自覚した時、自分も他者と同じようにできない事実気づけるのだと思います。やはり愛してくれる人には喜んでいてほしいものですから、罪から離れる道はここから始まるのではないのでしょうか。そして福音書の中にも、愛してくれている存在に立ち返る歩みについて伝える箇所があります。かの有名な「放蕩息子のたとえ話」(ルカ 15・11～32)です。

この話の中ではある息子が父親の財産を求めるわけですが、その目的はというと、あてもなく自由に遊び回ることでした。息子が私たち人類、父親が神様にあたるとすれば、つまり私たちの信仰生活は得てして疲れを感じさせることもあり、神様から離れて自由気ままに生きてみたくもなるだろうと伝えているように思えます。しかし、これは実質的に神様との対立に入るという事でもあります。一方で、神様はいつも見守っていて、いつでも私たちが立ち返って帰って来れるように備えていてくださることを忘れてはいけません。

さて、息子は財産を使い果たすまで、それが無駄遣いであったことに気がつきませんでした。もしかすると心の中で危険を訴える声はあったのかも知れませんが、その場の楽しさと目先のゆとりを目をそらして考えないようにしていたのでしょう。いずれにせよ、息子は最終的に自分の行いの愚かさを悟って心を改めます。ここで回心できたのは、何も無くとも安からに生かしてくださる父親を思い出したからでしょう。心の中の思い出が声となって強く響き、その愛にできるだけ近い所に戻る原動力となったのです。

人は誰でも、罪への傾きを持っています。修復の難しい対立を作ってしまう事もあります。しかし、それを罪として認め、受け入れるためには、立ち返る場所が必要です。やり直す時の支えになる、愛に満ちた存在が必要です。そして愛の全ての源は神様です。信じる者として誰かの支えになっていけるよう、いつも神様に立ち返る恵みを祈り求めてまいりましょう。



「信仰の時間」

ABC ラジオ(朝日放送)

毎週日曜日 5:50～6:00AM

3月担当：大久保 武 神父(姫路西ブロック)

愛の声

(27日放送分より)



四旬節では私たち自身の罪について思い起こし、神様に心向け直す恵みを祈り合うことが特に勧められています。罪は一見、それとは分からない姿で私たちに忍び寄り、誘惑してきます。それは罪が神様に反対するものであるために、私たちの関係を悪化させ、憎しみ合い、傷つけ合う対立に至らせるからです。対立というものはお互いに不快な状態を続かせるものであり、幸せな人生にはつながりません。

しかし、対立を引き起こしてでも成し遂げたい事というものが、私たちの間には往々にして存在するようです。多くの場合はより良い未来を目指してのことと思われませんが、それでも対立そのものは望ましいことではありません。た

とえ目的を成し遂げたとしても、対立がそのまま残っていれば、築き上げたものがそこから崩れ去ることもあり得ます。ひとたび対立してしまったならば、その後の修復にも力を注がなければならないでしょう。そこにも、罪は活発に呼びかけてきます。”あの対立が無ければ成功しなかったのだから、いまさら手をつける必要など何もないのだ”と。そうして必要な行いを忘れさせ、復讐の連鎖へと向かわせようとします。

この罪を退けるには――自分が罪の状態にあると気づくには、自分自身の力よりも、自分を愛してくれている誰かの声が必要なのではないのでしょうか。その声は、文章であるかも知れないし、思い出